

中東・イスラーム世界史の研究

はせべふみひこ
長谷部史彦

文学部東洋史学専攻 教授

中東を中心にイスラーム世界の諸地域を歴史学の視座から考える本研究会には、3年生と4年生の計20名が参加しています。

本研究会には、中東やイスラーム世界の歴史と現状に興味を抱く若者が集まっています。イスラーム世界といっても、現在のイスラーム協力機構（OIC）57カ国に限定しているわけではありません。中近世のアラブ史研究者としては少し無謀かもしれませんが、西暦7世紀以降現代に至るまで、史上のイスラーム王朝・国家が支配し、法や宗教としてのイスラームが重要であった全地域の政治経済・社会・文化を研究対象としています。中東のみならず、イベリア半島、シチリア島などの地中海の島々、サハラ以南アフリカ、バルカン、内陸アジア、インド、東南アジア、中国なども積極的に視界に収め、イスラーム諸地域と他の諸地域との交流・関係史にも踏み出しています。

このため、学生諸君がそれぞれ独自の問題関心で選び、絞り込んでゆく卒業論文のテーマは実に多彩です。中東史に関しては私が先んじていると信じ

ていますが、例えば、近代インド・ムスリムの政治運動、現代ソマリアの海賊問題、ムガル朝の建築、ボスニアのイスラーム化といったテーマについては、一緒に調べ、学び合っているというのが正直なところでは、まさに「半学半教」です。研究対象を広く設定しているのは、参加者の視野が広がり、様々な問題の所在に気付く契機が生まれるからです。各々が個性的に切り込み、論拠を示しつつ自由に報告し、質疑応答する中で、「自己の相対化」という果実が得られるのではないかと思います。「討論のための討論」ではなく、報告者に有益な対話をしようという雰囲気¹が維持されていることもゼミの自慢できる点です。複雑多様な中東・イスラーム世界の過去と現在に照らして自らをかえりみることを。若い諸君が自らの進路を選択し、難しい時代を生き抜くうえで、それが何かの役に立てばと思います。ゼミを続けている次第です。

歴史を通して見えるもの

なかむら かおり
中村香織君 文学部東洋史学専攻4年

当研究会では、一般に中東といわれるエジプト・シリア・イラクなどの歴史を中心に学習しています。地域・時代が幅広いため個々の研究テーマも様々ですが、どんなテーマでも長谷部先生が丁寧に解説してくださるので、自分の研究分野外についても理解を深めることができます。メンバーも個性豊かで、みな異文化に興味関心を持っています。

歴史を学ぶことで諸外国が現在の関係に至った背景を知ると、普段目にするニュースも別の角度から見えてきます。また、世界と日本の価値観の相違や、日本文化の特異性を再確認できます。毎週のゼミで次から次へと自分の知らない事柄が出てくるたびに、世界の広さに圧倒されています。



世界の第一線で数の研究

数の理論は奥深く純粹で、研究しているときどき驚くことも、わくわくすることも、激しく落ち込むことも、飛び上がるほど嬉しいこともある。

栗原将人

理工学部数理解科学科 教授

整数論は数の世界を探究する学問で、4000年以上の歴史を持っています。整数論というと単純な対象に見えますが、新しい概念や理論が次々に作られ、今では高度に抽象化された理論となっています。20年前にフェルマーの最終定理が解決したときは大きな話題になりました。振り返ってみると、私は子供の頃から数が好きでした。中学時代に整数論の専門書を読んで、中学の「数学」と違う自由な発想がいろいろあり、算数に近くておもしろく感じました。しかしそのときはそれ以上専門的に勉強しようとは思いませんでした。大学に入って、「数学は確かに自然科学なのだ」と思える瞬間がありました。数学は「数学的自然」を探究する科学です。その一端がこのとき見えたのだらうと思います。そして、数学的自然が織りなす世界をいろいろ巡った末、最終的に本物の整数論に魅かれていきました。

私は、最近では整数論の中でも岩澤理論という理論（プリンストン大学の岩澤健吉先生が1950年代に創められた理論）を研究しています。アメリカやヨーロッパなど世界中で研究されている理論です。先に書いた数学的自然界を記述する数学という言葉は、一般人にとってわかりやすい言葉でないのが残念ですが、ゼータ関数という解析関数の値にひそむ数論的な意味を明らかにする理論です。最近の自分の研究では、方程式の解の様子のような数論的なことと、ゼータ関数との関係が、今まで知られていた以上の関係で結びついてることを発見したり、さらに進んで予想を立てたりと、新しいことがわかってきて、非常にエキサイティングです。

私の研究室は数理解科学科の中では大きな研究室です。数学の研究は国際的ですから、皆でケンブリッジ（英）やボストン（米）でのウィンタースクール、サマースクールに参加したり世界各地で行われる研究会に参加したりしています。ロンドンやミュンヘンの大学に数カ月滞在して研究を行ってきた学生もいます。皆、世界に目を向けて、新しい研究を行っています。

栗原研究室で過ごして

とき お びき
時尾 響君 理工学研究科修士課程1年

栗原先生の指導のもと、「数学の女王」と呼ばれる整数論を研究しています。先生から今までの知識との関連や背景を教えてください。ついに理解できたときの達成感や名状しがたいものがあります。研究室のメンバーはみんな仲が良く、早慶戦観戦のほか、夏には合宿にも行きます。合宿では与えられた課題について発表するほか、前夜の懇親会を物ともせず、毎朝6時に湖の周りをジョギングしたり（させられたり?）、蓼科山（標高2,530m）の登山もしました。普段、運動をしない私にはかなりつらかったのですが、山頂まで登りつめて見た眼下の景色は、格別でした。その過程と喜びは、証明を一步一步苦労して理解することにより理論全体が見えてくる、という数学に通ずるものがありました。

